

須走口登山道17か所に汚物

5〜6合目 「遺産の管理能力疑われる」

世界文化遺産に昨年登録された富士山の須走口登山道(小山町)で、登山者が捨てたとみられる汚物が17か所に散乱していたことが16日、県の調査で分かった。これだけ多数の汚物が登山道で見つかったのは登録後初めて。県は同日、環境省や地元的小山町に報告するとともに、携帯トイレの持参など登山マナーの徹底を呼びかける方針だ。

世界遺産

富士山

県自然保護課によると、須走口5〜6合目にある登山道付近の茂みや岩場に汚物が放置されていた。5合目から6合目にかけては、時間程度の道なので、カラマツなどの木が育つ限界の高さであることから、モラルの低い登山者が茂みに隠したとみられる。

今月初旬、「汚物が捨てられている」との連絡が県にあり、14日に職員が調査した。富士山では、これまでも汚物の存在が繰り返し問題になってきた。山頂の山小屋のトイレから垂れ流された汚物や紙が山肌へばりつき、「白い川」と批判されたこともある。環境省や県は山小屋にバイオトイレを整備する一方、登山者に携帯トイレの持参を呼びかけ、マナー向上に力を入れていたばかりだった。

富士山の平均気温は平地と比べて低い。山頂では夏季の一時を除いてほとんどが氷点下のため、風雨にさらされても汚物は分解されにくいという。同課は「世界文化遺産を汚す、恥ずべき行為だが、何年間も汚物が残ってしまうことが最も問題だ」と懸念する。

白糸の滝そば 電柱撤去へ

10本 富士山望む景観改善

富士山は世界文化遺産に登録された際、再来年2月までに環境などの保全計画を国連教育・科学・文化機関(ユネスコ)に提出するよう求められている。都留文科大の渡辺豊博教授(富士山学)は「(世界から)遺産に対する日本の管理能力が疑われる」と指摘したうえで、「山小屋のトイレが閉まった後は、携帯トイレの使用を義務付けるなどの対策が求められる。罰則付きの県条例を作り、汚物を捨てることを抑止することも必要」と危機感をあらわにしている。

推進検討部会が、電線の地中化と電柱の移設を進めることを決めた。県道路企画課によると、撤去する電柱10本は、白糸の滝の観光客用駐車場に通じる県道の約380メートル間に立ち並んでいる。この電柱と電線が、滝つぼに向かう歩道や休憩施設から富士山を仰ぎ見る際に視界を遮っているとして、地元から対策を求める声が上がっていた。



白糸の滝の近くの休憩施設から見た富士山(県提供、昨年12月24日、富士宮市上井出)

現時点では5本が地中化の対象になる見込みで、残る5本は視界を遮らない駐車場内へ移設する計画だ。着工時期は2016年度中で調整が進んでいる。電柱の地中化は、静岡市清水区の構成資産・三保松原周辺でも進行中。県は「他の構成資産でも、関係市町の声を聞いて対応したい」とした。